

太田説（「古代日本文学思潮論(II)」）があるが、この両説は聊か趣きを異にしている。即ち徳田説が「古事記の原資料たるものは先旧辞（本辞）であり帝紀ではない」とし、「この旧辞の出所は諸氏の氏文・雅楽寮の舞楽・神語祭詞・起原伝説その他宮廷の古伝などにあつたものであろう」とされるに對し、太田説は「（古事記の）素材内容としては皇室中心の累代の相續志として帝皇日繼とでも帝紀・先紀とでも呼ぶにふさわしいものが、ある条件のもとにおいてすなわちある様式（筆者注、太田氏はこれを意圖的に由緒ある口頭表現とされる）をとつてゐる時に先代旧辞とも本辞・旧辞とも呼ばれてよかつたのである」としておられる。

さて、この後説、ともすれば従来前説を以て通説と見做してきた大方の研究者に對しては甚だ奇異の感を与えるものであろう。が、かかる観点に立つ時古事記はその成立の事情を我々に臆げながらも示すことになる。帝紀的要素と本辞的要素とはまさに次元を異にする對極的なあり方であつたのだ。それは「帝紀本辞結合説」を採られる諸家が一樣にその説かれる帝紀的要素・本辞的要素の抽出に困難を訴えられる神武・応神両記のあり方にも関わる問題でもある。この両記が古事記にあってとりわけ重い位置を占めるものであるだけに、かかる帝紀・本辞不可分の形態をして原資料の原形を窺わせぬ迄に整備された完成の姿と見るか、はたまたこれこそ原資料の倂を窺わしめる本源的な相と見るか意見の分かれるところであらう。が、ここに私見を示せば、この形態こそ古事記の原形であり古事記存立の基盤であるということになる。両記にわたり余りにも顕著な内容の重複——実は神武・応神と並び神の諡号を有する崇神天皇の記をここに配すれば一層明らかとなるが——こそは、漢風の史書の体裁を指し、各代の天皇の個性を重く見、かつ皇統の連綿たることを主張せんとする帝紀的立場にも拘らず遺された、八鎮魂詞記Vとしての古事記の本質的なあり方——本辞的領域の徴証であつたといえよう。古事記の本質は天皇の神格完成および即位の経緯、その結婚および御子生みの物語に尽きるのであり、その同じき主題が微妙な変化を見せつつも歴帝のご事蹟として反復さるべき

性質のものであつたのだ。

かかる本辞的領域が書記された資料というよりは口誦的な特質を頭わに示し、時に芸能的特質をさえ見せているということは注目される。その最も著しい例としては応神記八国主の奏Vの条が挙げられよう。ここには国主が己が氏族の靈魂の象徴たる剣を奉り、己が氏族の靈魂を籠めた国主酒を奉獻し、さらに己が氏族の靈魂を籠めて奏をなしている趣きが明瞭に看取されよう。即ち、本辞の背景には八言靈Vの信仰が脉々と流れ続けているのである。

中根千枝氏のいみじくも看破せられた八タテの社会構造Vなる日本社会の構造体系（「タテ社会の人間関係——単一社会の構造——」）は、氏族靈の奉獻という形式をとつて古代社会にも嚴として存在する。しかして、それが八言靈Vの信仰と結ばれて存在するところに古代社会の一の特質も存し、かつ古代社会と言語の一の関わりも証されるものといえるのではあるまいか。

## 古代文学と言語

小野 寛

このテーマは古代文学研究者にとつてまことに「切実な問題」であり、いつも気になつてゐる問題であるが、非常に「厄介な問題」である。私は先ず高木市之助、時枝誠記両碩学に学びたい。

高木博士のこの問題に関する諸論考は「古文芸の論」に収められているが（「文芸の技術的性格について」「近代詩——源流を考へる」「文芸と言語」など）、結論的に、文学と言語の関係を否定的に考へる立場をとつておられるので、私は仮にこれを「言語否定説」と名付けた。博士は芸術の本質として技術の觀念を導入され、三木清の「構想力の論理」から「形」の概念をとり入れられた。技術によつて作られたものは形を有するのであつて、形の見られる限り技術が見られるとするものである。文学においては、それは「ことばの技術」である。それは——博士は「言語的なものを止揚して、その彼

方に……求めなくてはならない」とか「言語が更に新しい別の次元に更生して文学的創造に参加する」とかいう表現を使われるが——言語を積極的に生かすことであると、私は理解する。言語はそのままで文学的創造をなし得ないという意味で「言語否定」だが、その一たん否定された言語に新しい命を吹き込んで生き返らせたところに文学はある、と博士は主張されているのである。この根柢にある言語観は伝統的な言語観で、言語を文学表現の媒材であるとする考えであるらしい。ここに問題がある。

時枝博士の論はその主著「国語学原論」の続篇に詳しいが、文学は本質的に言語そのものであるとして、文学と言語の連続性を説かれるところから、私は仮にこれを「言語連続説」と名付けた。博士の言語過程観に立つならば、いかなる文学表現もそれが表現であることにおいて日常の言語表現と異なるものでなく、文学表現のもつ美的享受の対象となるべき美、鑑賞に堪える美は、言語そのものがその本来の実用的機能を高めてゆくところに現われるもので、決してその実用性つまり日常の言語そのものを否定して別個に文学の言語を再生させるのではないという主張だと、私は理解する。しからば日常的言語表現と文学表現とをその連続の中において分つものは何か。博士は、「一切の言語は、心の発芽であるが、それが、美しい花になって行くところに文学を見」と言い、文学は「言語の句ひゆく姿」「折目正しい言語」「綾ある言語」だと言われた。心の発芽である言語が美しく句う花になって行く過程は、ただ実用的機能の高まりなのだろうか。「花」は「芽」が育って行ったものでありながら「芽」とは全く異なる。ここに問題がある。

私は自分の拙い結論を主張することを避け、初期万葉に属する次の二首を例示したい。

(1)わが背子は仮廬作らす草なくは小松が下の草を刈らさね(巻一

一一)

(2)たまきはる宇智の大野に馬なめて朝踏ますらむその草深野(巻一・四)

(1)は「稚拙にして子どもの口調に類して居り、それだけ純真な情がこもってゐる」(島木赤彦)、「単純素朴のうちにいひがたい香気のするものである」(斎藤茂吉)、「単純さ——この生活性、この日常性こそその和歌のもつ姿だった」(中西進)等と評されている。この歌は相手に向かって呼びかけ命令する表現である。言語の日常的機能をそのまま發揮した如き表現である。しかしこれは文学である。素朴ながらもいいがたい「ことばの技術」がこの歌を支配しているのだろうか。

(2)は「豊腴にして荘潔、些の澁滞なくその歌調を完うして、日本古語の優秀な特色が隅なくこの一首に出でゐるとおもはれるほどである」(茂吉)、「朝踏ます」『草深野』の円味のある爽やかな言葉づくりや「らむ」の流れるやうな響など微妙な言葉のつらなり方は瞳目すべき豊潤さを生んで居る」(五味智英)等と評され、この歌における優れた詩的造語と表現技巧が指摘される。また、意味の伝達という点からはナンセンスである「たまきはる」の句が、この歌で「他に絶対にいいかえのきかぬ不可欠の機能を果している」(西郷信綱)という。このように(2)はその詩的な言語表現が目される歌なのだ。この「美しい花」を日常的な言語と連続の相において見ることができだろうか。

万葉集における言語表現はそれが歌の世界であるだけに、(1)の日常的生活的言語そのものによる表現と、(2)の日常語そのままでない、やはり言語の日常性を否定したところに新しく生み出される(原理的には日常語から発している)詩的言語によるもの二つを認めねばならないのではないか。